

# 新しい専門知の創出を

島田周平（しまだ・しゅうへい）  
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授



## 地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九四八年、富山県
- ② 専門分野・地域……アフリカ農村社会のポリテイカル・エコロジー ナイジェリア、ザンビア
- ③ 学歴……東北大学理学部（人文地理学専攻）
- ④ 職歴……研究所研究員（二二歳、一三年間）、大学助教授（三三歳、五年間）、大学教授（四〇歳、一三年間）
- ⑤ 現地滞在経験……ナイジェリア（二八歳、二年間弱、客員研究員）、ナイジェリア・ジンバブウェ、ザンビア（三七歳、八カ月、国際交流基金派遣計画）、その他一〜二カ月の短期調査多数
- ⑥ 研究方法……ナイジェリアとザンビアで、定量的調査と聞き取り調査を併用した農村調査を実施。現地の古文書館での調査も行っている。

## メッセージ

① 研究者になったキッカケ  
研究所の地域研究部に入ったのが私にとっての地域研究の始まりである。その研究所を知ったのは大野盛雄編著『アジアの農村』（一九六九）を通してであった。大学の学部時代に読んでいたフェーブルの『大地と人類の進化』（一九七一）、飯塚浩二の諸著作や和辻哲郎の風土論も私を地域研究に誘う下地を作っていたと思う。さらにその源をたどれば、生まれ育った富山県の地理教育にたどり着くかもしれない。キッカケの根は深い。

② 第一部「現場の悩み三〇問」を読んで  
地域研究をめぐる質疑では、研究関係の話、教育関係の話、社会的存在意義や就職関係の話など、幅広い議論がなされているが、ここでは研究と教育関係についてのみ私見を述べる。

地域研究者は、地域研究が③で述べるような可能性を秘めているとどこかで感じている。そのため、時に疎外感を抱きつつも意外に意気軒昂として研究に励むことができる。しかし問題は、どのようなキャリアパスでその研究者になり得るのかという点である。地域研究をめざす若手研究者は、時に賞賛を受けつつも現実には厳しい就職問題に直面している。

- ⑦ 所属学会……日本地理学会、日本アフリカ学会、人文地理学会、国際開発学会、環境社会学会
- ⑧ 研究上の画期……ビアフラ内戦（一九六七〜七〇年）。独立後に起きた分離独立戦争としては最も本格的で悲惨な結末を迎えた戦争であった。難民問題、飢餓問題、白人傭兵問題等日本でも広く取りあげられ、支援活動も行われた。この内戦の結末は、アフリカにおける国境線の見直しの難しさを改めて認識させるものとなった。
- ⑨ 推薦図書……Berry, Sara (1993) *No condition is permanent: The social dynamics of agrarian change in Sub-Saharan Africa*. The University of Wisconsin Press, Madison. フラア生産農民研究の第一人者が到達した、アフリカ農民・農村社会論を論じた本で、地域研究が専門科学に発信できるひとつの模範例を示した良書といえる。

「特定の地域を見ることを通して世界を考える」ことの必要性については社会的認知度が高まってきている。しかし、「地域的多様性の中からある法則性を抽出し、あわよくばパラダイムの転換や新しい専門知の創出をねらう」という③で述べるような基礎研究レベルでの大きな可能性についてはあまり認知されていないと思う。そのことが就職先が拡大しない一因かもしれない。

## ③ 地域研究の魅力と可能性

地域研究の醍醐味についてはすでに拙著『現代アフリカ農村』（二〇〇七）で述べた。ここでは専門分野の学問との比較優位といった点のみを強調していた。しかしそれよりも大事な点は、地域研究がまったく学問分野の枠外に新たな専門知を生む可能性を持っているという点であると考ええる。さまざまな専門分野の研究者がフィールド調査に出かけることも多くなり、現地で調査することは地域研究者の専売特許とはもはやいえない。地域研究は既存の学問の枠内で取り込むことが可能で、かつそれで十分という認識が広まる可能性がある。しかし、多分野の専門家が共同で行う海外共同研究などで現地調査のファシリテーターの役割を果たす以上に、地域研究者は新しい専門知を創出しようという大きな野望を持っていることを、時には積極的に発信する必要があるのではなからうか。